

三種神器圖之
柳本大明神神階宜下次券并和歌

142
◆
3



142
3



三種神器

一神璽八坂瓊曲玉也舊事本紀曰令玉作祖櫛明玉神
作八坂瓊之五百箇御統玉矣禁秘抄云神璽首禊
于今不替壽永自海庭來出以青色絹裹之以紫系
結之如網内侍持間下緒入程緩管中鏡一程物動返返
不可傾

一說神璽有二一則三種宝物中也神祇令所謂神璽
之鏡劔是也一則自上古傳來之印也天子即位禊祚時

用此印，公式令所謂天子神璽，祿祚之日壽，璽室不用者，是也。今藏司所掌神璽，則公式令所謂神璽也。

一或說曰：神璽，天子內外印也。內印，方二寸五分，位以上位記及下公文於諸國，則捺之外印，方一寸半，位以下位記及太政官文案捺之。諸司印，方一寸二分，上官公文及案移牒捺之。諸國印，方一寸，上官公文及案調物捺之。下云

一法劍草薙劍，日本紀曰：素盞鳴尊於出雲國簸之川上拔十握劍，斬八岐大蛇，至尾劍，又少缺，故割裂其尾，視之

中有一劍，此草薙劍也。本名天叢雲劍，蓋大蛇所居之上常有雲氣，故名天叢雲劍。云然名草薙劍，則人皇十一代垂仁天皇時鏡劍自大和國笠縫邑鎮座于伊勢國度會郡五十鈴河上。十二代景行天皇四十年，日本武尊征東夷，冬十月，拜伊勢神宮，仍辭于御伯母倭姬命曰：今被天皇命而東征，將誅諸叛者，故辭之。於是倭姬命執天叢雲劍授日本武尊曰：慎之，莫怠也。是歲日本武尊初至駿河，其所賊欺尊曰：是野也。麋鹿甚多，當臨而

狩日本武信而入野而見獸賊放火而燒其野日本武
尊以天叢雲劍薙攘傍草因之得免難故号其劍
曰草薙劍日本武尊討東夷後置此劍於尾張國魚市
郡熱田神体是也

一素盞鳥尊大蛇斬玉時尾劍取玉是神劍也吾何敢私以
安手乃上獻於天神是宝劍也

一壽永比安徳天皇入海時宝劍共入海書事是誤也入海
劍益御座御劍也此事傳授也可秘ト云

一内侍所鏡御靈八咫鏡云御靈謂鏡也古事記曰此
鏡者專為我御魂而如拜吾姿云天照太神御靈魂
有此鏡故以鏡曰御靈今伊勢内宮神體是也咫寸
也此鏡徑八寸故曰八咫鏡

一說曰圍六尺守此鏡一名内侍所或曰賢所日本記曰
素盞鳥尊是無道天照太神乃入天石窟中被懸六
咫鏡云此鏡石凝姬命之所作也

一日本記曰使鏡作部遠祖天糠戶者造鏡又曰神

方開磐戶而出焉是時以鏡入其石窟者觸戶
小瑕其瑕於今猶存此即伊勢崇秘之大神也
一肅氣記曰八咫鏡火珠所成玉本有法身妙理也亦
名邊都鏡亦名真經津鏡亦名白銅鏡

一禁秘抄云白川院仰云因侍所神鏡飛出欲上天
女官懸唐衣袖奉引留依此因緣女官奉守護

云云

一神勅曰天照太神以御子忍穗耳尊為葦原中國

主授寶鏡曰汝見此鏡如見我姿常同正殿而可
座不可離置矣其後忍穗耳尊以此鏡授御子瓊
瓊杵尊自其代々地神相傳至神武天皇入大和國
造新都時隨往古神勅以三種寶物同床而坐也
見日本記

一肅氣記曰天照皇太神持寶鏡而祝之宣吾兒視此
寶鏡當猶視吾可乎同床共殿以為齊鏡寶祚
之際當与天壤無窮矣則授八坂瓊曲玉及八咫鏡草

草薙劍三種神賤永爲天皇

一神皇正統記曰崇神天皇漸畏神威而即位六年
己丑以神代鏡造石凝姫神初子令鑄鏡以大目筒
神初子令造劍於大和國宇多郡作此兩種爲護身
之璽安置同殿以神代寶鏡及靈劍託皇女豐鋤
入姫至大和笠縫邑立離奉崇焉自茲神宮皇宮爲
各別云云

一柳三種ノ儀ハ神書之肝心王法ノ樞機也誠日本神

代ヨリ當世ニ至ル迄久堅ノ天ケ下ノトカニテラシ現
難ノ地モウコカス皇統永ク一種系ニシテ立王業余
連綿シテ修セラル、爰偏ニ三種ノ靈威ニヨレリシカレハ
輒其品其徳ヲ談スヘカラス畢竟心地ノ秘法也惣テ
禁中ノ作法ハ先神事後他爰且暮敬神之獻慮

無懈怠云云

- 一十種神宝 羸津鏡 邊津鏡 八握劍
- 生玉 死及玉 足玉 道反玉 蛇比禮 品物比禮

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

柿本大明神

神階

上郷着伏座 奥

宣下次第

次職事来仰々詞

次上郷移着端坐

次上郷令官人敷軾カヒツキヲ

次上郷以官人召大内記カ々々卷軾

次上郷仰々詞カ如職事

次内記持泰 宣命草位記等入宮

次上卿披見畢賜内記候小庭

次上卿奏弓場代付職事

奏聞 内記以 管相從 先内覽

職事 奏聞畢返賜仰可令清

書由

次上卿復伏坐仰可清書由内記

此間取出位記 置右方

次内記持奏清書入管

上卿披見畢内記退入

次上卿以官人召將監候小庭

次上卿仰請印事將監退入

次掃部察立案於軒廊

次少納言主鈴將監等列立案下

次上卿以官人召外記仰云中務輔

外記候哉外記申候由

上卿仰云召外記称唯退入

次中務大輔參進執

上卿取出宣命置右方

賜位記輔賜宮經小庭置位記

於案上披之

次少納言捺印中務輔於案下卷之

次中務輔返上位記宮於上卿

次上卿披見畢中務輔退入此間少納言以下退入

次上卿以官人召內記賜宣命

位記入宮內記候小庭

上卿就弓場代以職事

奏聞內記以管相從先內覽

職事 奏聞畢返賜

次上卿復坐內記置宮退入

次上卿以官人召內記問使參否

外記申候由

上卿仰云召使來執

次上卿賜宣命位記於使賜

之退入

次上卿以官人名内記返賜管

次上卿令官人撤軾

次上卿起座

宣命

天皇我詔旨止柿本神乃廣前申賜倍

申久時波千載判歷多礼道波百世宗

公私敬礼座須靈德彌畜久神位猶卑

依利天殊尔有所念行天正一位乃御冠上

奉利宗奉流因茲從四位下行侍從卜部

朝臣兼雄平差使天御位記令捧持奉出

復此狀乎聞食天下安寧尔詞林繁采尔

天皇我朝廷乎常盤堅盤尔護賜比助賜止倍

申賜シタカハ波久ハク申ス

享保八年二月一日

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

柿本社

右可正一位

中務千載垂光萬邦仰德究
誠直於神道開蘊真于歌林
宜授極位式耀祠壇可依前
件主者施行

享保八年二月一日

二品中務卿邦永親王宣

五位下行中務卿藤原朝臣國廣奉

從位下行中務卿中原朝臣職水行

官符
大政官符

石見國

應奉神位記事

納韓櫃壹合

宛夫貳人

使從四位下行侍從下部朝臣兼雄從捌人

神部壹人

從壹人

右五位行權大納言源朝臣通躬宣奉勅為奉
柿本大明神位記差件等人宛使矣遺者
國宣兼知依宣施行仍須國牧辛潔齊擇定

使所ヲ與使者共披讀 宣命ヲ然後國司請
取位記奉之不得違失符到奉行ヲ

正位上行ヲ中辨藤原朝野ヲ賴倫ヲ從在街屋頭兼ヲ東槻ヲ禰判奉

享保八年二月一日

享保八年二月十一日

直書

六の日の光りとして糸を世にきりよのまにきり

竹号

阿計丸

まとの色やうにならして是竹のふれはらふの事

直書

個平二条書白

何れもいかにあつて清書のねんをはらひてまはる

物号

公道正親町

ふりかへる所のまのまをまらぬのめうをうらむ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters 'おのれ' and 'おのれ'.

享保八年二月十日
おのれ
おのれ

おのれ

おのれのきこえにしておのれをたふさぐにたふさぐ

何事
阿斗丸

おのれのきこえにしておのれをたふさぐにたふさぐ

おのれ

おのれ

おのれのきこえにしておのれをたふさぐにたふさぐ

おのれ

おのれ

おのれのきこえにしておのれをたふさぐにたふさぐ

柳露

後法坊城

けり娘のまゝのまゝにけりら柳の枝をいひの枝露

春の月

致季西堂寺

あつたのまゝをぬきそぬの枝をいひおははらにまじりぬ

山花

寛隱寺老の海

みよのまゝにけりぬまゝのまゝにけりぬのまゝにけりぬ

野毛

公澄徳也井

おまゝにけりぬのまゝにけりぬのまゝにけりぬのまゝにけりぬ

尚代

光榮鳥居

なほまゝにけりぬのまゝにけりぬのまゝにけりぬのまゝにけりぬ

去後

兼親中山

よものまゝにけりぬのまゝにけりぬのまゝにけりぬのまゝにけりぬ

更衣

家久由信

まゝにけりぬのまゝにけりぬのまゝにけりぬのまゝにけりぬ

郭云

公治今出川

橋のかゆるまゝにけりぬのまゝにけりぬのまゝにけりぬのまゝにけりぬ

盧橋

為後後名

おちまゝにけりぬのまゝにけりぬのまゝにけりぬのまゝにけりぬ

平昌

新胤(兼宗)

ゆたはらひの代魚みははせしと教らるるの日の暮

夏月

系忠(夏浪)

る見得秋にゆきて夏月さるるの日の暮

寛治

雅季(信休)

はらちちくしつにきくゆきもみゆきあつらん秋の暮

納涼

通時(宗岩)

あにたしくせしやう海をよけてせきくくした日の暮

甲秋

輔實(九条)

扇ももやちくしつにきくゆきもみゆきあつらん秋の上

把秋

尚房(万里)

蕨のゆき花ちくしつにきくゆきもみゆきあつらん秋の暮

寛治

西夏(人)

あにたしくせしやう海をよけてせきくくした日の暮

秋夕

信方(七條)

ゆきあつらん秋の暮

駒込

宗(信)

あにたしくせしやう海をよけてせきくくした日の暮

花月

雅春四糸

あみのほろおのるの月の光を照らす花の影を

花月

久季梅園

枝葉をさぐりて花の影を照らす花の影を

胡霧

実定 押小海

いかに雲の影を照らす花の影を照らす

紅葉

ぬ村冷泉

秋垣に花の影を照らす花の影を照らす

花秋

雅香花多丹

あふくは花の影を照らす花の影を照らす

花菊

高祐

こや葉の影を照らす花の影を照らす

花氷

公理 書名 少海

はからん氷に照らす花の影を照らす

花月

基雄 持徳院

その影を照らす花の影を照らす

花月

菊夜 高

花月を照らす花の影を照らす

篠敷

隆成 櫛目

この先のことが... 此の地の...

甲書

師季の書

末の所へ村の... 書に... のいはせ

炭竈

水永竹田

炭の... の... の...

初志

邦永親王伏見

我... の... の...

新志

宗建親王

此... の... の...

新志

重季の書

い... の... の...

聞志

隆典の書

な... の... の...

見志

氏孝の書

重... の... の...

見志

重季の書

た... の... の...

週五

泰章 倉橋

昔よりそまゝそのお蔭もろからず其の末まで

偽造

宣紙中出

このころはしきりに其の人のことを案外にたのまん

変造

宣紙中出

此のころはしきりに其の人のことを案外にたのまん

古寺

古社

このころはしきりに其の人のことを案外にたのまん

久遠

有難六条

このころはしきりに其の人のことを案外にたのまん

ふた

ふた

このころはしきりに其の人のことを案外にたのまん

ふた

宣紙中出

このころはしきりに其の人のことを案外にたのまん

龍宿

龍長 龍尾

このころはしきりに其の人のことを案外にたのまん

連懐

光政 外山

このころはしきりに其の人のことを案外にたのまん

祝言

直躬中流

け時にりつるを伴とよあひにまらんまにあをせり

顔者

後若希年相

奉次

三束中流云

享保八年三月十日

博摩屋
沖喜丸

柿本社出法樂

五辰始洋年

のりくまをいひに直躬あつて流をかくせぬ物かみり

言出石

若忠ニテ束

也宗あつたまは流つていひまらかり軍あつて若のいひ

梅をこ葉

直仁

あのをいひまら垣流の梅をこ葉つていひまら若のまは

園子殿

直躬

若中へにかきて笑ふまは流つていひまら若のまは

メま返

直躬

メま返いひまら垣のまは流つていひまら若のまは

梅月

若方梅月流

いひまら梅をかほり流波に流月をかまら流り

漆海丁

若後三束也

り丁たうと和ふにや書くは隣にわたりん

花初冠

幸教九条

梅紀嘆をありうか白き乃わるる雁うりやうき

花は山

常世

幸はもてり豊かも美にしやう庵のしん

花は山

重孝庭白

うらみとむもあきたんはふにうらみあはれ

河敷を

実明

い水にうりふにふいふにふいふにふいふにふいふに

花埋去

光和卯山

かきこるに木のみにうきもあはれは後嘆をせむ

郭公歌

邦永親王

汐澄しんしんうらむけはたしんしんしんしんしんしん

子田

常雅花山院

うらみとむもあきたんはふにうらみあはれ

遍盧橋

師音石山

いあふむしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

夏月涼

実合遠中舟

夕暮のらぶの露の華に花を流し 五月日記

山又直

後作

けのろに花を流し 五月日記

山又直

後作

散まらぬ花の露 五月日記

山又直

後作

夕暮のらぶの露の華に花を流し 五月日記

山又直

後作

夕暮のらぶの露の華に花を流し 五月日記

山又直

後作

夕暮のらぶの露の華に花を流し 五月日記

山又直

後作

夕暮のらぶの露の華に花を流し 五月日記

山又直

後作

夕暮のらぶの露の華に花を流し 五月日記

山又直

後作

夕暮のらぶの露の華に花を流し 五月日記

山又直

後作

あつしつにいはるや春長としは折りし秋の松に

月か山

お香

いづれも光世にこそ書きたるはしつら秋の松の

ねつ月

秋香

あつしつにいはるや春長としは折りし秋の松に

水江月

も範ふ条

と書きたるはしつら秋の松の

紅葉涼

幾海

あつしつにいはるや春長としは折りし秋の松に

昔秋香

重香

あつしつにいはるや春長としは折りし秋の松に

長月夜

貞建無動に

あつしつにいはるや春長としは折りし秋の松に

松島涼

公諸に何れ

あつしつにいはるや春長としは折りし秋の松に

言ひ帯香

徳右衛門

あつしつにいはるや春長としは折りし秋の松に

冬月夜

有記六条

かきくろくはるくちうくちうくちうくちうくちうくちう

留千巻

宣紙

ゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ

栲場書

宣紙

はゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ

市井書

為紙

こころを海に流す海に流す海に流す海に流す海に流す

寄書

宣紙

かきくろくはるくちうくちうくちうくちうくちう

寄河立

宣紙

かきくろくはるくちうくちうくちうくちうくちう

寄書

宣紙

かきくろくはるくちうくちうくちうくちうくちう

寄書

宣紙

かきくろくはるくちうくちうくちうくちうくちう

寄書

宣紙

かきくろくはるくちうくちうくちうくちうくちう

宣紙

宣紙

眼のこぼれはるに花中りか衣かつてまらんまら

隣家鶏

兼香一糸

中垣の上の鳥いたるまゝい夜ぬきにおらん

ま村竹

ま久島翁

はらうし氏のあはれと末唐のけはる縁は善行のま

日家翁

はらえてはらうらせとぬきゆはらうらぶ思甲の中ら

夕後り

兼道

こいよんはまらうらまら名新海にいとゆの縁人

浦嶋を

基長東園

ゆまてあはれなまあはれなまらうらむ海まら浦のま

舟道祝

舟城のむせをせにいほにて君を信とやうりゆとまら

頭者

飛香如臣

奉公

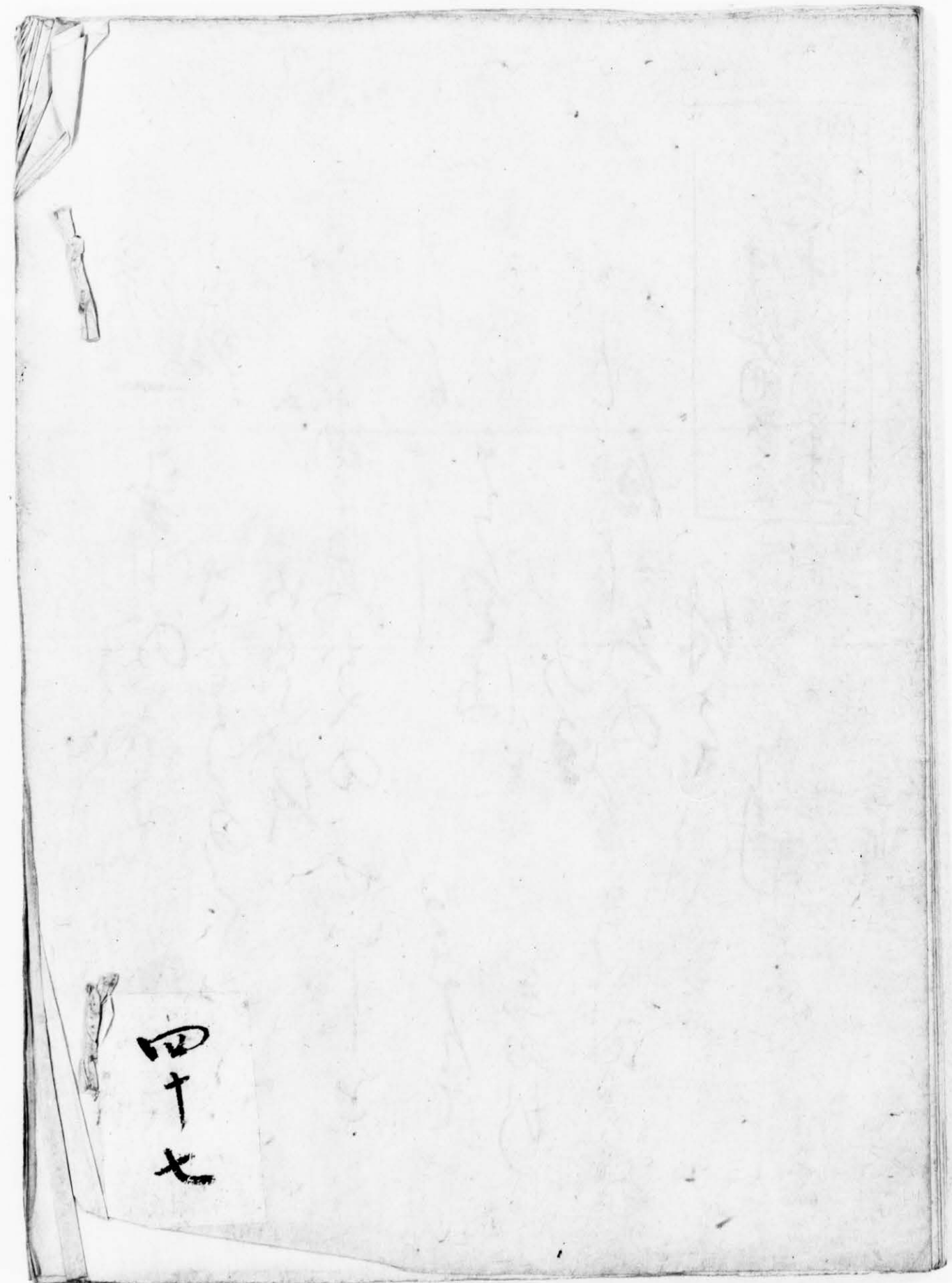
鳥丸中御云

妻松安ん中

従六位下津和臣意親

兼み隠方也

あはれはの君あはれはの津垣にあはれはのまのねん



四十七